

水時計

佐藤 秀子

歴史上の人物に関する記述を読むのは……特に非運の最後をとげた……という時など心痛む思いがする。

万葉集に神亀六年に左大臣長屋王、死を賜はりし後に倉橋部大王（伝未詳）が作る歌、それに続いて、作者不詳で膳部王（長屋王の子、吉備内親王、神亀六年二月、父に殉じて母、兄弟とともに自尽）を悲傷しふる歌として、

よのなかは 空しきものと、あらむとぞ この照る月は
満ち欠けしける

の一首がある。親しい間柄のもの作であろうか。悲しみが切々と伝わってくる。

ある本には藤原定家が二十八才で左近衛権少将に就任して以来、十三年も昇進をさせてもらえない憤懣やるかたない思いが赤裸々に書かれている。昇進嘆願状^ノが載っている。これは、ふっと笑わせてくれるし、小野道風筆と伝えられ国宝に指定されている「秋萩帖」は貴重な紙を節約してか唐時代の中国の典籍の裏面を利用して書かれているとの記述を読めば、又、少しおどろいてしまう。

正面像とは、違った一面をみることは歴史の楽しさであり、雑学的なことを知ること人間性や時代の背景を知ることができる。

本を読むことと、人間と話をすることと、どちらが好きかと問われて知人は、もちろん後者と答えた。画商という仕事柄、出会う書家や画家、それに奈良や京都の有名寺の管長や住職、その人達と話すことの楽しさは、仕事のことは忘れてしまうほどだ。創作をする人達の輝きは、自信となつて顔に表われているから、やはりその心情が、話し相手にしみてくるのだらうし、達観した管長の話は、人生書を読んでいるより、様々な指針を示してくれるに違いない。

旅も不思議な人との出会いだ。昨年、大阪へ行く為、ホームで電車を待っていた時、亡くなった叔父にそっくりの人が向こうからやってくる。わたしは思わず、あいさつしてしまつて「すみません、叔父にそっくりだったのですから」と言つてしまつた。駅に来る時間が三分でも遅れていれば会えなかつただらうし、叔父に又会わせてくれた事の運命を感じ謝した。

西宮の大谷美術館でみた万葉歌人で、人間国宝の紙塑人形師作の額田

王の美しさは、その紅い被布の色のみごとさと、白い知的な表情をした顔。それはまさに何度も何度も気の遠くなる作業の積み重ねが愛情になり魂を持った結果だった。額田王の歌を読むうち、情熱にあふれた彼女を自分の手でこの世に現わさずにはいられなかったのだろう。

王朝時代は、時がゆっくりと流れていたのだろうか。こと有る度、読んでいる真情のこもった歌をみるたびに、昔と今の時間は違う質と量を持っていただろうかと思ってしまう。例えば、藤原氏の摂関政治時代、政權掌握には、娘を後宮に入れ、その腹に生まれた皇子を天位につけ、天皇の外祖父という親権を得るには、十年も二十年もの年数がかかるのである。その時を待つ悠長な生活の中で季節の移りかわりや月見の宴など折にふれての自然に対する関わりは、今のわたし達の比では到底なく、感ずる心を持っていた平安人に対し、とても羨ましい気がする。自由な時間が限られているのは、つまらない。流れ、動いているのは自分のほうだと思いたい。

日常を離れて、出かける時、行きあたりばったりのバスや電車に乗って時を忘れるのはどうだろう。自分を証明するものは何も持たず、必要以外喋べらない。それとも心に少しでも感じる人がいれば話しかける？ 絵や焼きもの、古美術品をみている時、個々に対しての感じ方はそれぞれ違い、心動かされたものはいつまでもみている。その心染みゆくまで、ものに対峙できる喜びは時間を気にしない一人行でなくては果たせない。けれど、二人連れの話し声は、やはり耳につく……。少しさみしい。

今、珍重されている骨董も、昔は、庶民の日常の雑器だったものも随分あるとか。自分の大切なものや、気持までもに封をして、床下とか屋根裏部屋に置いておけるものなら、何十年後に開けてみるのも一興だ。かつて人がいた空間は、凝縮した思いが、やはり少しずつ残っていて、以前、わたし達に与えてくれたような感動を再び味あわせてくれるに違いない。

古いことを訪ねたり想い浮かべたりするたびに、わたしは最近の町並保存のあまりの明かるさが気になってしまう。白壁やふきかえられた瓦は、居ずまいを正してしまい、心情を吐露してはくれない。雑草の生えた道や、うす暗い小路、くずれかけた塀をなつかしがっているのは、わたしだけだろうか。あたりに落ちていた怨霊や魍魎ちみもろりょうは、いったいどこへ行ってしまったのだろうか。

博物館や古い美術館の暗い空間、そこに漂ようひんやりとした気、彼らが落ちのびた安任の地は、もしかしてここだろうか。